

序『カラム』の時代 X

マレー・イスラム世界における自然と社会

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム(Qalam)』とそれを取りまく同時期の東南アジアのムスリム社会の動態に関する論考をまとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の10編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去9編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス(Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウイ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化とともにアラビア文字を使用したジャウイが主流と

なった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウイはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領(マラヤ、シンガポール)でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウイからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウイ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラ

1) 『カラム』誌については[山本 2002a]が詳細な紹介を行っている。

2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ(Ahmad Lutfi)などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシんでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げた。彼の伝記として[Talib 2002]がある。

3) 現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった[山本 2002a: 263]。

ヤ(マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であった。このため、従来の研究関心は民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に集中しており、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにするうえで貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集めたうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学東南アジア地域研究研究所(旧京都大学地域研究統合情報センター、以下京大地域研と略記)の共同研究「東南アジアの国民国家の形成過程における民族・宗教の対立(研究代表者:坪井祐司)」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で9年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築と『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照(<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/jawi/index.html>)。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室などにおける資料収集により、『カラム』の全228号を収集した。そして、京大地域研が進めた雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開された⁶⁾。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースは、ローマ字による記事見出しの検索はできるものの、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字に翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト(雑誌データベース班)による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア(Klasika Media)社との提携により、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである⁷⁾。この作業は2016年に完了し、その成果をもとに翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにするための「カラム雑誌記事データベース」の構築を進めている⁸⁾。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・イ

6) http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM

7) 翻字の作業は、『カラム』以外のジャウィ雑誌についても進められている。2017年には、『ジャウィ雑誌復刻シリーズ(Jawi magazine reprint series)』として、『ワルタ・ジェナカ(Warta Jenaka) vol.1, 2』、『カナ・カナ(Kanak-kanak)』、『プレダラン(Peredaran)』の3編が翻字・復刻された。

8) <http://majalahqalam.kyoto.jp/>

インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁹⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコーダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である¹⁰⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコーダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2)『カラム』共同研究

プロジェクトのもう一つの柱は、『カラム』のデジタル・アーカイブを利用した共同研究である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心にもとづいて『カラム』やその他の同時代資料の分析を行い、年に3回程度の研究会を開催して議論を行っている。その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが10編目となる。本編の内容については次節で紹介することとしたい。

2018年度の共同研究では、これまでの『カラム』研究の蓄積を踏まえつつ、同誌とその言説を同時代の東南アジアのムスリム社会全体の文脈へと位置付けることを目的とした。このため、『カラム』以外のイスラム運動や出版物の資料もまじえて1950、60年代の東南アジアのムスリム社会の動態を総合的に分析する

9) データベース化が進められている雑誌の詳細については、[山本編 2010a: 6]を参照。

10) <http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>

ことを目指した。とくに、『カラム』の論説が主に対象としたマレー・シンガポールにくわえて、インドネシアにも視野を広げることを重視した。この作業を通じて、脱植民地化の過程において各地でさまざまな民族・宗教の対立に直面しながらも、その社会的危機の克服のため、ムスリムが様々な形で統合を模索した時代性をうかびあがらせることが可能になると考えたためである。

同時に、プロジェクトでは、『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアやシンガポールにおける共同事業や成果の発信に努めている。2013年度から、京大地域研とクラシカ・メディア、マレーシア・ジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。これは、翻字された『カラム』記事の復刻版およびそれに関する論文集『遺産から展望へ(Dari Warisan ke Wawasan)』を電子書籍として出版するものである。ジャウィの電子アーカイブ化事業は、マレーシアのマレーシア国立図書館、言語図書館(Dewan Bahasa dan Pustaka)とも提携して行われることとなった。それとともに、本プロジェクトはこれまでに年1回程度マレーシアにおいて『カラム』に関する研究成果を報告するワークショップや学会セッションを開催してきており、成果の国際的な発信も行っている。

プロジェクトでは、今後ともマレーシア、シンガポールの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

3. 本論集の構成

本論集は、論文3編と『カラム』に関する資料編からなっている。以下、内容を簡単に紹介したい。

坪井祐司「マレー・ムスリム知識人からみた『災い』」

坪井は、雑誌『カラム』のなかから現代マレー語で一般的に「災害」を意味する“bencana”という語がどのような文脈で使用されているかを分析し、災いという語に投影された当時のイスラム知識人の認識を論じた。災いとは、人間の力を越えた望ましからざる状態を幅広く指した。『カラム』を執筆したイスラム主義の知識人にとって、災いをもたらす主体は神であり、そこでは自然災害であるか戦争などの人災であるか

は区別されなかった。災いは神と人間の関係性から起こるものであり、人間が宗教的に正しくあることで、災いを回避できると考えられた。逆に言えば、災いが起こったということは、宗教的に正しくなかったと解釈された。彼らは、人間のふるまいを見直す契機とみなし、さまざまな災いを避けるためには宗教的な正しさが必要であると訴えた。災害を自らの宗教観、世界観のなかに取り込むことで、自身のイスラム主義の主張へとつなげていったのである。

光成歩『カラム』が論じた女性の権利と自由 ——コラム「女の園」より

光成は、「女の園：女性の権利と自由」、「女性の世界」など、『カラム』が掲載した女性に関するコラムを分析した。筆者ウナム・ムフシンは、主筆エドルススの筆名であった。初期の「女の園」は、西洋近代批判とイスラム伝統主義批判を前面に出し、イスラム本来の価値として女性の権利と自由を強調した。この主張は、初めて掲載されたコラム「女の園」の「成年を迎えた女性」によく表れている。しかし、「女の園」の中盤からは女性の権利と自由の主張から女性への模範の提示に焦点が移っていった。「女性の権利と自由」を副題とする「女の園」自体が1954年に姿を消し、コラム「女性の世界」がこれに代わった。『カラム』全体としても、女性をめぐる論調は自由恋愛の過度な浸透に警鐘を鳴らす立場に移っていった。女性の権利と自由を強調したコラム「女の園」は、そうした過程で『カラム』における位置を失っていった。

山本博之「ムビン・シェパード」 ——元イギリス人植民地官吏の歴史学者

山本は、マレー世界の歴史的英雄ハン・トゥアを扱った映画の脚本を書いたイギリス人植民地官吏で歴史学者のムビン・シェパードをとりあげ、『カラム』が刊行されていた時期のマラヤ社会を別の角度から見ることを試みた。イギリス人の高等文官としてマレー村落社会の地方官を歴任したムビンは、マレー文化や歴史への関心を深め、劇団を組織するなど、職務のかたわら文化振興に努めた。戦後も行政官として非常事態下における共産党鎮圧作戦に参加するとともに、マラヤ歴史協会の設立に参加し、ハン・トゥアを扱った演劇興行も成功させた。マラヤの独立後もマラヤに残って公文書館の館長に就任し、国籍を取得してイスラム教に改宗した。その後もマレー演劇の研究を進め、映

画の脚本を執筆したほか、国立博物館開設にも貢献し、マレー文化の振興に尽力した。

資料編：「千一問」試訳(その4)

コラム「千一問」は、『カラム』に毎号掲載されていた名物コラムで、読者から投稿された質問に関するQ&Aコーナーであった。本編では、過去3編からの続編として、第61号(1955年8月)～第85号(1957年8月)の「千一問」の試訳を掲載している。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、その位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の3編の論考から浮かび上がる『カラム』とそれを取りまく東南アジアのマレー・ムスリム社会の位置づけについて、簡単に記してみたい。

1950、60年代は、マラヤ・シンガポールの脱植民地化の時代であり、新たな国家の枠組みが成立するとともに、マラヤ国民やマレー民族の内実が固まっていく時期であった。『カラム』に代表されるマレー語メディアは、その議論の場となった。そこにはマレー人という集団の枠外に出自を持つ者も参加し、多様な議論が交わされた。

『カラム』の主筆エドルスはアラブ系の出自を持っており、イスラムの視点から同時代のマレー人のあり方を論じた。『カラム』に集ったイスラム知識人にとっては、世俗的な民族主義者が主導する脱植民地化は宗教の危機であった。さらに、急速に進む近代化は、女性の社会進出など、従来のムスリムの価値観を揺るがす要素を含んでいた。

坪井論文は、「災い」をめぐる言説を通じて、彼らがムスリム読者を自らの世界観に取り込み、宗教的な正しさの主張につなげようとしたことを論じている。光成論文は、女性の立場をめぐって、エドルスが女性の権利を肯定する改革主義の立場をとる一方、過度な世俗化には懸念を示し、制度面に議論を取れんさせていったことを示している。近代国家・社会におけるイスラムのあり方は、民族主義が強力であったこの時代にも大きな論点であった。

山本論文がとりあげたハン・トゥア物語とムビン・シェパードの事例は、イギリス人に代表されるヨーロッパ近代的な知がマレー人の民族文化に影響を与

えたことを示している。マレー・ムスリムの民族性は、ヨーロッパやイスラム世界とのさまざまな相互作用を通じて形成されたのである。ただし、山本が指摘するように、ムビン・シェパードが傾倒したマレー文化は宗教色が薄く、イスラム志向の『カラム』とは交わらなかった。これは、民族主義にイスラム主義が対峙した『カラム』の時代の特徴といえよう。この後の時代、「イスラム化」として国家がイスラムを取り込み、マレー民族とイスラムの一体化が進んでいくことになる。

脱植民地化とはこうした多様な勢力の主張がぶつかりあう過程であり、異質な他者をつないだメディアや言論活動が存在感を示した時期であった。『カラム』やそれを取りまく言説に焦点をあてることは、国民国家や民族主義の枠に収まりきれないマレー・ムスリムの社会史を明らかにすることにつながる。そして、現在のこの地域のムスリムを含めた多民族・多宗教の社会を考えるうえでも重要であるといえよう。

坪井祐司・山本博之編 2016 『『カラム』の時代Ⅶ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践(CIAS Discussion Paper No.62)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編 2017 『『カラム』の時代Ⅷ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク(CIRAS Discussion Paper No.68)』京都大学東南アジア地域研究研究所。

坪井祐司・山本博之編 2018 『『カラム』の時代Ⅸ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク2(CIRAS Discussion Paper No.78)』京都大学東南アジア地域研究研究所。

山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20、pp.259-343。

山本博之 2002b 「ジャウイ綴りマレー語の書き方と読み方——20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』20、pp.359-382。

山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究統合情報センター。

参考文献

坪井祐司、山本博之編 2011 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編(CIAS Discussion Paper No.19)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2012 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計(CIAS Discussion Paper No.23)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2013 『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成(CIAS Discussion Paper No.32)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b 『ジャウイを学ぶ(CIAS Discussion Paper No.38)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2014 『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2015 『『カラム』の時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活2』(CIAS Discussion Paper No.53)』京都大学地域研究統合情報センター。